

真 生

第一卷八月號

□ 靜かに自分の立つてゐる周圍を見つむれば一切は自分をつゝんで大悲の中に向上せしむべくつとめてゐる。

□ 何といふ不思議な世界であらう、世間の謂所善悪も賢愚も悲喜怨愛も、靜かにながめて來る時は一切が私をして如來の大道に立つ可く勸めてゐるのである。

□ 修行の無常も其のままに、寂滅爲樂の涅槃である。永遠より永遠に眞人の行く手が開かれて、凡てが光に充たされて、ミオヤの慈悲となつてゐる。

□ アサガホの花の中に居る蟻が花全體を見ることができないやうに、單なる自分の對面しか見ることができない人には宇宙の大道や如來の大悲は判らない。

□ 然乍ら、心一度人生の本義を尋ね、萬法の本體、人生の歸趣、如來の大悲を直觀せば自然は自ら吾人の爲めの靈境である。我等は何を爲すべきか、そこに生存の意義もある。

□ 吾人はすべからず現代を超越すべしだ、そこに初めて人生達觀の世界がある。永遠の光と無限の力が、私を包んでゐるのである。光明の世界、念佛の世界、永遠より永遠にそこは如來の慈悲海である。(念)

稱名念佛に就て

土 屋 觀 道

念佛に就ては我國の人ならば殆んど誰知らぬ位に知れ渡つてゐることであるが、念佛とは如何なる意味のものであるか、又如何にして此の世に現はれて來たものであるかといふことになる。殆んど之を知る者が無い。たまたま之を知ると雖も之を信するに至つては甚だ少いことかと思ふのであります。依つて今私は此の念佛殊に法然上人の信仰に顯はれたる稱名念佛に就て少しく信するところを述べて見たいと思ふのであります。

さて宗教といへば色々の宗教が世に行はれてゐるのであります。念佛信仰の如きは其の中の最も進歩せる宗教であつて、殊に人類の理想と實現に於て最もよく徹底したる教へであると思ふのであります。この事は已に法然上人の信仰生活によつて最もよく現はされたところのものであります。其他之を印度支那及日本の佛教思想の變遷發達の事實に眺め、又私共の宗教の理想と實現から考へても必ずこの心の歩みをたどるものだと思ふのであります。否少くとも現に私の宗教生活は其の歷程を踏んで來たのであります。然らばどうして斯かる稱名念佛の信仰とまでなつて來るかといふに夫は宗教信仰の進歩の結果であると思ふのであります。此の意味に於て念佛が如何なる經路をとるかといふに、一體私共の理想生活といふものは其の初め日常生活に對する要求として心の満足すべき色々の要求を求むるに始まるも

のであつて、遂には之を現實の上に實現せねば止まぬものとなるのであります。こゝに於て吾人の理想が理想のままに全分現實の上に實現せられない場合には之を實現し得べき其の方法として、更らに大なる理想が現はれて來ねばならぬのであります。換言すれば初めの理想は人類究極の理想であつて第二の理想は此の理想を實現すべき方法手段を込めたる實際上の理想とも云ふべきものであります。この意味に於て人類が人生最高の究極目的のみを要求するといふことは其の理想の初期の間であつて、やがては其の理想が實際生活の上に實現することを求めて止まぬものとなるのであります。然乍ら、如何に此の理想が高尙幽玄にして人智を極めたるほどのものであつても若し此の理想にして吾人の力の及ぶこと能はざるものであつた時には如何であらうか、夫れは單なる空想に外ならぬことになつて終ふのであります。而かも此の理想要求が最も眞實にして人類の根本要求たる永遠の生命と無限の向上とに關する場合、吾人は之を以つて單なる空想なりと見ることが出來ないのであります。而も之等に對して自分の力が之を得るに足らざる時如何にして之を完ふべきかは更らに來るべき人類眞實の要求といはねばなりません。而して今我が稱名念佛に就て考ふるに理正に此處に來てゐるのであります。所謂自力聖道の法門に於て、人類の理想と目的とを明かにせられたるに關かはらず、其の修道の困難にして自己の力の及ばざる時、而かも此の理想と目的とを達すべき眞實の要求と方法とが他力淨土の法門として開けて來たのであります。

一體佛教の本質とも云ふべき最高の理想は各自が成佛すると云ふことにありますが、然らば如何にして此の目的を達するかといふに夫には自己の煩惱を絶滅して自己の佛性を開顯するといふことにあります。

す。然るに此の理想は吾人の根本要求であるにかゝはらず、一般人類の生活としては到底之を全顯することができないのであつて、こゝに理想と現實との間に於て幾分の懸隔のないものはないのであります。茲に於て自己の本心は現實生活にのみ満足することが出来ないで永遠の生命と無限の向上とに眞實の人生を發見せんと努むるのであります。而かも一度自己の生活に於て、幾何の生命と價値の生活を實現してゐるかとの眞面目なる自己反省を爲すに至つては更らに一層の理想と現實との明かなる矛盾の對比が自覺せらるるに至るのであります。然して是時自己の實力足らずして理想實現の到底不可能なることを知るに至つて、更らに吾人の要求は之を何等かの力によつても満足しやうとするものであります。然らざれば吾人のこの根本たる要求は到底これにて満足するものではないのであります。而して此の人生最後の悲觀に當つて吾人を永遠の光と無限の向上とに救済し盡さんとして現はれて來たのが即ち我等の信ずる念佛であるのであります。

此の事に就ては日頃から私の主張する所でありませんが殊に世間の人々即ち相當の考へあり智識ある人々にして未だ宗教の何物たるかも知らず、勝手に之を是非したり、或は迷信呼ばりさへする人のあるに至つては大に反省を促さすべき所であります。更らに又宗教研究に幾分の志ある人にして往々念佛を難する人のあるに至つては未だ宗教信仰の發生的起原と理想的究極とを知らざるより來るとはいへ斯くの如き眞實宗教の大道を難するに至つては更らに大なる反省を促すべきであります。尤も只念佛が南無阿彌陀佛と申すばかりで更生することができるといふことを聞くと一般の人には素より、自力聖道の法門によつて修行せる人には自己の努力の餘りに峻嚴にして難行なるに比して其の念佛の餘りに容易なるを

眺めては信ずることさへ困難であらう。然乍ら靜かに自己の本質を顧みて人生々活の本義を思ふ時、我等は永遠の生命と無限向上の眞實世界に果して生きてゐるであらうか、更らに日常の生活が意義ある意味に送られてゐるであらうか、理想なき一般人類の生活は云ふにも足りない、然乍ら、眞實に道を求むるといふ聖道自力の人々に於て果して我等はその道に於て眞實人生の大道を此の土に於て全顯し得つつあるであらうか。戒定慧の三學は斯くの如くして如實に體驗せられてゐるであらうか。斯くの如きは自己に仕ふることの最も眞實にして初めて之を知ることができるのであります。

然らば口稱念佛の意義如何、又如何にして此の世に現はれて來たのであるか、法然上人の念佛は最も平易に此のことを私共に一層深く明かに開示せられたのであります。即ち上人は此の意味に於て永い間此の聖道自力の法門に於て如實に解脱の道を求められたのであります。即ち上人は此の機根の之に堪え無い爲め自力聖道の修行困難にして遂に他力淨土の念佛に歸入せられたのであります。此の時の上人の喜びか如何に強く且又深かりしかは實に言語に絶し、所謂心氣一轉永遠の生命と無限の向上とを此の念佛の中に發見せられたのであります。いはば最高の理想を最も容易く誰れでも得らるといふのが上人の宗教的理想であつて、こゝに宗教の普遍化人類化が現はれて來たのであつて、所謂文化の理想中心を爲して來たのであります。されば法然上人の口稱念佛の法門は少くとも一應自力聖道の法門を通つた上から現はれて來たものであつて、聖道門的理想と實現とに眞劍に着手した人にして初めて淨土念佛の如何に絶大にして深遠なるものであるかを知ることが出來ると思ふのであります。夫は何故かと申しまするに自力聖道の法門は實に人類の理想を高潮せること至れり盡せりであつて、佛陀の生活を剎那の上に全顯し

やうとするのでありますから、理想としては之ほど最高の理想は無く又之程力強い宗教は無いかに見ゆるものであります。さてどれ丈其の理想と現實とが矛盾なく自己に實現できるかとの深き反省を來たす時、理想愈高くとて實行益々不可なるを知るに至るのであります。否更らに自己人格の反省の深刻なる人々は己が理想のみ高くとて實行一として之に伴はず、反つて日々の生活が理想に遠ざかつて行きつゝあるを知るのであります。茲に於てか道を歩むること眞剣なるものは自己の罪業のいと深きと其の業報の行業にをのきて更らに一層の煩悶と苦惱とを覺え之が解脱の道を求めざるを得ないのであります。而して茲に初めていと深き人類の罪惡的意識と衷心よりの深刻なる求道心とが現はれて來るのであります。如來大悲の眞門は念佛易行の大道として茲に開けて來るのであります。十惡の法然房愚痴の法然房が只だ念佛して往生はするなりと茲に初めて人類救済の普邊の眞門が開かれて來たのであります。されば社會の不安に生活し、自己の罪業に惱める人々には念佛は正 闇夜の燈火であり、迷へる人には實に人生々活の中心生命であるのであります。

加之、聖道の法門は三寶歸依とはいひ乍ら、主として如來を忘れて法のみの生活になり勝ちである。然るに淨土の法門は如來中心の念佛であるからして、念佛の聲するところ心には寸毫も如來を離るゝものではない、そこに温情きはまりなき慈愛の如來は現成するものであつて、人類同志の清き生活もそこに温かき人の心として通ふのであります。然るに本來佛教の正態は如來中心の人格的自由の生活であつて、決して因果論的律法主義の宗教ではないのであります。然るに計らずも佛陀の滅後佛徒の中に於て主として佛陀の遺法教儀に依つて其の道をたどりとするの結果所謂小乘佛教の形式主義に墮したので

ありますが、之を打破るべく立つた所謂大乘佛教も其の聖道門的自力修行の道人には尙之を法然上人の他力念佛の妙法に比ぶれば更らに幾分の依法佛教たるを逸れないのであります。乍然道を求むること眞剣にして眞實自己の自力修行が力足らざることをはつきりと知るに至つては如來の大悲と本願とに信頼して念佛稱名に歸るといふことは理の當然であつて、永遠の生命と無限の向上とはこゝに始めて開かれ、人生の歸趣も又こゝにあるのであります。

されば念佛とは正に如來に歸り如來に生きたることであつて、私共の本心からミオヤに叫ぶ呼び聲であるのであります。而かも如來は私共のミオヤと聞く、四十八の大願は衆生招喚の御聲であつて、如來の方からの呼聲であるのであります。されば私共が念佛を申すといふも單なる自力の念佛ではなく、心から本願に歸するの念佛であつて、此の間吾人の理想は此の念佛によつて初めて復活し來たり、稱名裡中如來の慈光に攝取せられて念々稱々斯光の中に靈化せらるゝの有様であります。即ち闇愚に等しき吾人の心が念佛稱名の慈光裡中に限りなき望みと力と喜びとを持つて復活し來るのであつて所謂如來中心の眞人生活も此の中に於てのみ初めて眞實に展開せられて來るのを覺ゆるのであります。されば念佛は實に佛教に教理の發達としても正に來るべき佛教の正態であつて、如何に人類の理想が此の念佛の稱名によつて完成せらるるかを明かにすると共に、又如何に如來の大悲が我等衆生の上にまで遍ねく十方に輝いて念佛の衆生を攝取し給ふかといふことを伺ふことが出來るのであります。而して吾人は如來大悲の宏深なるを思ふと共に益々自己の修養を怠るなく、更らに進んでは慈光宣傳の上にも立つべく靈化運動を試むべきだと思ふのであります。(七、一〇)。

眞實の生活

大阪 豊田 生

吾等はどう云ふものか自己の分際を思はずに只向ふ而已を見て而かも自己の智慧の及ぶ範圍とやかかくと勝手氣儘な熱を吹き政治はどうの教育はどうの宗教はどうのと批判をやる一體今日の吾等は自己の價値を何れ位認めて居るかと云ふに極めて淺薄なもので丁度酒に酔つたものゝ様に知識や學問に酔つて始終中心がぐらつき足もとがひよろつひて居る爲に見聞覺知するところが悉く的外れ脱線になつて居る様である官吏も軍人も政治家も實業家も労働者も實に氣の毒な程脱線して居る様である色眼鏡をかけて眺めれば萬有が悉く其色彩を帯びて見えるのと同じ様に根本精神に矛盾を持つて居つて少しも氣付かず盲目的に突き進みたまさか危いと注意されれば反つて一笑に附し更らに矛盾を究めんとする抱負もなく又努力もせず生涯不徹底な泣寝入の姑息な生活を繰返して居ると云ふ有様で如何にも心外千萬な事である而かも

續けて漸く人間に生を得たのであるから脱線が本當で本當な事が却つて間違つて居る様になつて居るので一切が顛倒して居るからである此事に是非氣付いて貰ひたいのであるが中々骨の折れたことで理屈丈では到底此境地へは進み難いのである一切が轉倒 世界である眺めることが出来て而かも轉倒の生活と協調を取るところに宗教味があり人生味があるので佛陀たり基督たり得たのもつまり此點に目覺むることが出来たからのものであるどうかして此境地に至りたいものである轉倒の生活の根本とも云ふべきは自我中心にあるので自我を中心として萬境に對し造作するが故に悉く宇宙の法則に背いて束縛の世界と現れて居るのである併しながら此束縛と見るのが己に眞理に觸れない結果で眞理が體得出来れば實に一切が無碍自在で悠々自適的境界が吾がものとなるので生活の状態が一變して實に活氣ある歡喜の生活に移るのである此生活こそ眞に活き甲斐のある生活であつて吾等生存の意義なるものも此境地に至らなければ眞に味ふ事は出来ぬのである此生活こそ萬物一體

眞生

或者は文化の生活と叫んで文化なるもの、眞味を解せず矢鱈に得意になつて居る様であるが如何にも片腹痛い感がする今日の所謂文化と稱するものは精神文明を缺いた跛者の文化にて眞の文化とは云へない文化と喜ぶ後ろより非文化が絶へず立證されて居るのを見ても知る事が出来る譯である此精神方面の欠陥に心付かず只形而下の進歩に而已満足して居ると云ふ事は實に低級な生活で恰も塵芥溜から犬が肴の骨を探し出して喜んで居るのと何等撰ぶことのない生活と云はねばならぬ之はちと極端な様ではあるが物質萬能の生活は結局こんなものと思ふ若し人生が之を以て足れりと思ふ實際無意義なもので吾等は寧ろ人間を止めにする方が餘程氣がきいて居りはせぬかと思ふ全體吾等は人間として生存の價値を何んと眺めるかを調べて見たいのである恐らく此問題に對し満足なる答解を與へる事の出来るものは實に少からふと思ふ若しありとせばそれは答解者自身が大きな自己反省より湧き出たものでなければ眞物と云ふ事は出来ないものである夫れもその筈で無始已來生死流轉を

の生活であり天地同根の生活であり如來的生活の依つて來るところであるかくの如き生活は相待的感念を離れた所謂絶待の大我の生活から産れるので所謂天地の心を吾が心とした生活で永劫に生死を離れた生活なのである古來哲人と云はれた人々の生活を見るのに何れも宇宙の精神を理想として之が種々の形式に於て體現された迄で道に二つあつた譯ではないのである吾等はとかく宗旨と云ふ型に落ち込んで宗教の眞味を味ふ事が出来ないのである而して宗教の極致なるものは要するに宇宙の根本精神を體得 吾がものとするにあるので之により一切が自由自在の境となるのでどふしても吾等は之を目標として進むべきであると云ふ宇宙精神と云つたのは哲學的の見方で之を宗教的に眺めれば如來精神と云ふべきである佛心とは大慈悲是なりとある如く宇宙の森羅萬象は一として如來精神の表顯でないものはないのである山河大地を始め一切の境は悉く慈悲同情の表はれなのである吾等が仇敵と思ふものも實は逆縁の恩寵なので菩薩行を行じて居るので一切が吾等を精練し慈悲哀

惑し大菩提に至らしめんとする増上縁なのである
此事に氣付くときに吾等は如何なる感じを持つて
あらうか確かに吾等は自己の今日迄やつて来たこ
とが悉く脱線的なりしことを痛切に慚愧し深刻に
懺悔の念を喚び起すと同時に如來の恩寵の如何に
も廣大無邊にして吾等の智慧分別の及ぶところで
ないことに氣付き明け暮れ感謝の念を絶つ事のない
生活に目覺める事になると思ふ此自覺は吾等の
生涯に非常なる新生面を畫するので人格の向上と
云ふのも此境地を實感し得るものでなくば偽物と
云ひたいのである此頃は上下共に不平の考を以て
充たされて居る世の中である權利義務の中毒で行
誦つて居る世の中である名譽も匙を投げ出し相
世の中となつて來た様である吾等も知らず知らず
の内に中毒して居るかの様な感を持つ場合もある
此下毒劑として最も力あるものは吾等が眞に堅實
なる信念を養ふにあるので實に佛心を體現する最
も目覺めたる生活に更生するにあるのである恰も
靜止せる水面に投じた石は必ず波紋を周邊に及ぼ
す様に此目覺めたる信念は必ず周圍を教化し一大

波紋を畫き下毒劑としての利益を與へることにな
るので即ち悉多たる一人の覺醒は釋尊として永劫
に無量無邊の人類を救濟し菩提を成就せしむる一
大波紋を畫きつゝあるのを見て吾等は大に此理
想實現に努力せざるを得ぬ事と思ふ而して此理想
實現には古來種々の方法もあるが吾等は種々の點
に於て念佛の一行が最も易修易行の様に思はれる
坐禪なども誠に結構ではあるが呼吸を整へ公案三
昧に入らんとして坐込んで三昧の境には容易に
入れぬ様である元來活動が持ち前である吾等にぢ
つと靜止を要求する修養法は或特殊の人には結構
であるがどうも一般向がしない様である之に反し
念佛の修養はよく人間の持ち前なる活動性を利用
して知らず知らずの内に眞如門に引入れ三昧現前
の境に觸れしめるのであつて吾等の如き凡夫相應
の巧妙なる方法と云ふべきである念佛を申すと云
ふことは因襲的謬見の結果葬式や法事の道具の様
に思はれて眞に活々とした靈に活きるの運動なる
事に心付かぬものが多い様である之は非常なる誤
りて之が爲あたら貴重なる人生を形而下の満足に

没頭し闇より闇に生死流轉の生活を繰返へすので
何時迄經つても生死解脱の妙境に至る事が出來な
いのである人生は恰も生死解脱の彼岸に至らんと
する檜舞臺なのである吾等は如來の眼から見れば
一粒塵りの役者である殿様になるものもあれば足
輕に扮するものもある併しながら如來の拍手喝采を
仰ぐものは自己を忘れて役其ものに成り切つたも
のにあるので所謂役其ものを最も完全に體現し得
るものに俳優としての眞價を捧ぐるのであつて今
吾等の理想とするところも眞に如來の御心に融合
し同化し之を體現するところにあるので之にはど
うしても不斷の努力を要するので千兩役者も最初
から千兩役者ではないのである不斷の奮發と努力
との結果千兩役者として入神の妙技を演ずるに至
るので願行はどうしても離る可からざるものであ
る今日は何事によらず物質的に萬事を解剖せんと
する傾向がある宗教方面に對しても同轍で知識而
己にたよらんとする結果行結つて持ちも下げもな
らぬ状態にあるのを見受けるのであるが之は靈的
修養を俟たずして只理屈の上から現象界と實體界

とを一つに扱はんとする結果で之では到底満足な
る解決を齎すものでないと云ふ事を吾等は切實に
感ずるのである而して吾等の最も悦ばしく感ずる
のは靈的修養が漸次吾等の精神を向上せしめ朦朧
氣ながらも如來精神の體現を實感し無限の法悦を
感じ實生活に對し常に生氣潑洩たる宇宙的氣分が
味はれると云ふことは何んとも云へぬ難有い事て
今迄の闇黒の生活が打つて變つて光明の生活に入
つたので只々如來光明攝取の御力の偉大なること
を思ふと同時に何んとかして此不可思議功德を叫
ばずには居られぬことになつて來る終りに臨んで
近頃青年諸君の間に眞面目に道を求めらるゝ向が
ある様に思ふが之は誠に結構な事で幾分精神文明
の缺陷に目覺めた思想界混亂の今日是非とも正し
き目標に向つて慕進せしめたいのであるが之には
教育者に俟つよりも宗教家に俟つところ遙かに大
なるものがある様である此意味に於て特に青年宗
教家の自策自勵を希望する次第である。

懺悔錄 (抄) 其六

演 阿彌

おゝ私の光であり望みであり給ふ如來様よ。私は寺に任職して七年斗りも過ぎましたが何も取止めた事をしなかつたので何か爲る事は無いかと思ひ、漸く明治四拾四年の六月から子供の集りを始め十年餘も續けました。然し私の宗教心の衰ひに關しては全く没交渉でありましたからどうも満足する事が出来ません。此已前に寄り々々二三の人達と毎月一回宛念佛したり信仰座談をしたりして居りました物があります。夫を會員組織にしてM會と云ふ會を作つて見ました。會員は僅々三十六名でありましたが毎月廿五日には集合して禮拜儀をやり而して茶話會をして少し斗り信仰座談を致します。更に尙ほ年に一二回大會として名士を招き公開講演をして貰ひます。信仰の無い私は大日比三師の講説や彼此の著書等を讀んで其御話を致しましたり又時にも隣寺の方に來て頂いて御話をして貰ひます。斯の如くして自他の修養に資し度

いと存じましたが如何も念佛とか極樂とか云ふ事が私にびつたりしないのです。極樂淨土は非現實の物である夫れを念佛して往生を願へと云つたと、て其れは承知の出來様管がない。心の何處かの隅でも萬更いやでない氣もするが其れは下劣な安穩を食ぼる心からの動きに過ぎない而かもそんな子供騙しの様な事は愚劣極つた實に馬鹿々々しい事の様に思へて、淨土教位低級な物はないとさへ思ひましたものです。自分が何にも知らず而して自分が實に低級であると云ふ事は少しも氣附かないのでした。唯だ馬鹿げて教へられ馬鹿げて考られた其教が馬鹿げて見えるのですから如何しても信ずる事は出来ません。信じられなかつた事は實際無理ではありますまい。然し正直に私の赤裸々を白状する事は任職の權威に關し檀徒の信頼にも背く行爲ですから之も一寸出來難い。私が有りの儘を告白したならば恐らく檀家の方達は驚き悲しんだであらませう。私は止むを得ず自分の信不信は暫く柵に上げて置きました。然し自らを反省する事實に痛歎に堪えませぬ。其れでも習ふより馴

れるで毎月御話して居ると如何やら敬虔の念も出て來て如來様と云ふ考も臆氣に養はれては來りました。然し「我佛尊し」の譬へもあります通り最負の引き倒しをして柄にない機教相應の頓中頓のとしやべつて失敗した事があります。夫れは明治四拾三年の拾二月新らたに檀家になつた家に就ての事であります。其息子が日蓮主義に共鳴して后に其信者になつて居りました事を少しも知らないで居りました私は大正四年頃の事でありましたが、家族の者に法話をしてくれとの依頼を受けまして大變奇特の事に思ひ咄辨ではありますけれども淨土大意抄の文を題にして機教相應と云ふ事を一時問半斗りも話しました。何と云ふ馬鹿げた事でせう。二祖や三祖の時はこんな説も有力でありましたでせうが、後から出た日蓮宗に對しては屁の河童にもなりませぬ。寧ろ内懷を見透かされる様な者です。果して其年の十二月其息子は日蓮主義に改宗すると云つて信仰の告白書と共に「日蓮聖人の教義」と云ふ本をくれました。告白書の中に淨土教に對する批評があります。現實界と心靈界と

をどつちやにした低級な批評に過ぎませぬけれども信仰の無い私は之に對して反感こそ起れ其誤りを辨駁する丈の力がありません。元來我儘に育つた負け嫌ひの私に取つては實に一大痛捧であります。切齒扼腕するけれども無い袖は振られぬ。残念でした。實に残念でした。然し今に省れば如來様の御攝理がかく迄深刻に私の上に振り注がれて居る事、實に一大奇蹟と云つてよいと存じます。而も此頂門の一針は正に私の求道の根底をなす者であります。此事なくんば今日の信仰は永久に私を訪づれなかつたかも知れませぬ。私は此事を想ふ時數斛の涙なきを得ませぬ。然し乍ら此時の私は信じ得られぬ本宗を去るか面押し拭ぐつて寺に居るかの二途に迷ひました。私に「母も有り妻もあり而して最早や幾人かの子供も有る様になつて居ます。其れに父の殘して呉れた不動産がある。其収入は僅かに一二月月の生活をさへる位のものですが寺の所有地と密接な關係にありますのでそんな整理も中々容易でありませぬ。そうかと申しまして其宗派に籍を置き其宗派の寺に衣食をし

て居る以上其宗派の信條に反する様な事を信ずると云ふのも頗る妙な物である様な氣も致します。さればと云つて鵜呑みに信ずる事は尙出來ない。私は引きづられ々々々々一日一日を暮らして居るのに過ぎません。徹底的解決は寧ろ恐ろしいのです。然し私に恵まれてありましたものは例のM會であります。此會が如何に私に取つて有効であつたか。知る人ぞ知る。本當に私は幸せ者です。其内に此會も第一回が満了したので第二回を大正六年の壹月から初めました。今度は四十六名の會員であります。其年の何時で有りましたか近くのS市で圖らずもS上人に御目にかゝり更に其停車場で辨榮上人の光明禮拜儀を一部頂きました。而して御上人の十二光佛の解釋は古來からの模倣でなく實に獨創的な尊い御説である事を承りました。が、間もなく辨榮上人がS市へ御見えになりましたので萬障を操合せて御講話を拜聴に出掛ました。どうも余り感心致しません一世紀位古い話を聞いて居る様な氣持でした。けれども何物か残る物はありました。はつきり之と取出す事は出来ません

けれども宗教的な或る感じを受け得た事を覺えます。此時「太靈の光」と云ふ小冊子を頂きました。讀んで見ると「成る程淨土教の中にもこんな活き活きた處も有るか」と共鳴させられました。私には信ずる迄に成り得ませんでした。知ると云ふ事と信ずると云ふとは似て非なるもので有りません。其拾月には例のM會でS上人を招き委しく辨榮上人の教説、念佛三昧に就ての實話も拜承致しましたけれど信仰とは如何してもなりません。然し其時の座談で土屋上人と云ふ青年では有るが實に信仰體驗の深い方の有る事を伺ひました時は、噫、世にはそふ云ふ人もあるか、私もどうぞして其様な純信仰に活きたい物であると始めて眞摯な心の湧くのを覺えました。然しまだ本當の物ではありません。越えて翌大正七年三月辨榮上人に御出でを願ひまして親しく御話を承りましたが、此時も一世紀向ふの人の様な氣がして何となくびつたり仕ない處があります。翌日は朝から四時頃迄御傍に奉仕して居りましたが唯だ私自身の小さい拙い部分が内省させられる丈で一種妙な敬遠的と

でも云ふ様な氣が致し居ります。一日晝を御書きになつてちよいちよい御話を遊ばされますが信仰への強い風は吹いて來ません。四時に御送りしてから「やれやれ」と氣か延びた様な心持さへ致しました。何と云ふ私の淺間しさであります。實は難値難遇 聖者に逢ひ奉る事を得乍ら然かも親しく御教へに接し乍ら求むる事は得爲さず「やれやれ」とは抑も何たる愚か者でありませうか。それでも御上人様からは御親しい御手紙を下される様になりましたし私も時々本堂へ行つては念佛して見る様になりましたのは不思議と云つてもよいかと存じます。それは直に嫌やになつて直に止めて仕舞ふ果無いものではありますかと嫌々乍らも自分の祈りとしての御念佛が申される様になつた事は正に聖者の無言の感化が功を奏したのである事疑ひ御座いません。かくの如くして私の求道時代は近付いて参りました。

(此已前寒中早起念佛會をやつた事もありました。それが殆んど御話にならぬ程度の物でありました)

信仰の楷程 念 阿

信仰の楷程を一段に分けて見ることが出来る。一に求道位、道を求めて未だ得ざるの位である。如何なる人々も一度は通らねばならない苦悶の時代である。

二に入信位、之は人生の復活位即ち初めて信仰には入つた歡喜の時代である。永遠の生命と無限の向上とがこゝに初めて顯はれて來る。

三に修道位、信後の修道である。入信の當初に得たる信念を日常生活に實現せんとする如來中心の向上時代である。

四に體現位、これこそ理想の完成期、成正覺の佛位である。人生最高の理想實現である。

此の四は私共の理想實現の楷程であつて、信仰進歩の階段である。我が敬愛する道友の人々よ、今私共は此の中の何れに位してゐるでありませう。人生は一度過ぎて又と歸らぬ今日の一日である。私共は眞面目な求道の人であらうか。更らに入信修道の人であらうか。共俱に深く自分を反省して如來の慈光に生きませう。

吾が朋便り(六)

○越後柏崎 原吉郎様より

心持ち丈は以前と格別變りもせず又信仰も別段退轉したとも思はれませんが餘り筆とる事とお話する事が出来難くなりました、畢竟修養未熟念佛不足之結果に外ならずと慚愧至極に存じてゐます。唐澤の三庵會も久ぶりの事でありますから是非共參加させて頂き度い思つてゐます。

○京都 青木一行様より

當方も無事御念佛いたしてゐます、殊に毎月第一第二の日曜を工場の休日と變更しましたので心置きなく三昧會にも出席されて喜んでゐます、「正態の念佛」を拜讀して何とも云へぬ心強さを感じま

した。

○名古屋 神谷善之進様より

唐澤山行きは鷺津様も二日斗りまゐると申され、番頭さんは一週間參加すると今から楽しんでゐられます。桑原(省三)様は今度二階住いになられました、家主の方が同じ信者ですから二階と下とで毎朝木魚の音勇ましく御念佛のよしであります。

○同 願王寺様より

本年は唐澤に參加いたしました心組みです、病後の静養は温泉にと人のすすめですから其の暇に別時に参りたう御座います。どうか障りの起らないやうに今から祈つてゐます。

○横濱 大坪文次郎様より

只今眞生七月號有難く拜讀いたして居ます。先達は神田の教壇で

お目にかゝりまして色々有益な御話承はりまして生返つた様な氣がいたされました。

○名古屋 吉永文雄様より

唐澤のお別時は私として最も思出多い處故何とかして参加いたしたいと存じます。當地も刻々に如來の靈光廣まり、時と共に自覺の道を歩まうとする人々の多くなることを誠にうれしく、如來の慈光の如何に廣大であるかを感じずには居られません。

○四日市 中野新兵衛様より

眞生の増刊誠に有難く存じます當方も先月來營業方面へ販賣と製造と分れねばならぬ程慈悲が惠まれ新芽が飛出でました、念佛によつて汚れた日常生活が清めらるる喜びは何物にも換へ得ざる者であります。社會問題の解決も確かに

此中に含まれてゐることを感じます。

○四日 市恒川董一様より

静な處で御勉強の出来るやう其の實現を祈ります、私も近々四日市の田舎へ引越す豫定少々は静かかと思ひます、空氣も宜しいから奥様と共に幾年でも御越し下さい私の上なき喜びあります。今日は定期の三昧會、中瀬様大矢知様も見えました。

○名古屋 桑原省三様より

平常は誠に無沙汰仕候次に私共兩人共御かげを以つて慈光裡中に明夜御念佛をさせて頂き居り候間乍憚御休神賜り度候來月は兩人にて唐澤へ隨喜させて頂き度今より樂入り申候

○東京 土屋觀道より

近頃私は自分の幼少の時から今

日までのことを静かに考へて見ました。其の間に於ける私の變化と

周囲との關係もありのまゝに思出して謂知れぬなつかしさとうれし

さを感じます。其の中で私の心に大きな不思議さを感じせし

むものは此の宇宙の中に私が住んでゐるといふことです。そうして

此の絶大なる宇宙の中に於て、如何なる御縁であるのか、かうして

皆様と共に知合となつて心から語合ふことの出来るといふことで

す何といふなづかしい心でありませう。静かに思へば限りなき心の

喜びであり、上なき人生の樂みであります。憎愛合せ入れ、清濁併せ

飲むことはよしでできないまでも近頃はどうかやらの等が等しく私をして

つてあります。

自由俱樂部より 四人が朝飯を食

はうとすると汁椀に窮する位ですが、集まる者の間には氣兼ねなどは

新舊に係らず少しもありませぬ。家に在る物は皆の持寄りて皆の使

用物です、集散離合如來様の御はからひに委かせてゐます、隣りが

部長さんで泥棒除け、夜の二時迄起きてる按摩さんも隣にあれば番

犬も居る、戸締りしたこと無いが盗まれもせぬ。近所の人がか

ゝ氣苦勞してることが滑稽に見えます。休暇で顯さんが歸省せら

れた儘の家へ歸て却て這入れず、鍵のあるのが怨めかしく思ひまし

た現代も制度の善用か無制度主義か何れか一方に依て解決せやうと

焦慮てゐます、そして此二は相反揆して益々力を強めてゆく(尅)

新刊紹介

次郎様 小黒鹿藏様

光二郎氏其他

石川良丹様 松田寅吉

様。上條次郎様

●自由俱樂部

○戀愛と宗教 中井常次郎先生著

○貳圓 法月光二様

○月水金曜夜其斷隨時

右は京都帝國大學の教授中井先生の

○伍圓 青木一行様

○金曜日夜土屋先生坐談會

の著者であつて、光明主義の信者

寄贈雑誌

○第三土曜夜西川光二郎氏坐談會

として戀愛の神聖と宗教の生活と

寄贈雑誌

振替口座東京四七貳八八番眞生社

を判りよく書いたものでありま

○奉仕 □明照 □聖書乃道

大正十一年二月三日第三種郵便物認可

す。讀んでも氣もちのよい手頃の

更生 □光 □法輪 □願生

大正十一年八月一日發行毎月一回一日發行

本です。申込所和歌山市東徒町五

無我の愛 □和光 □ころ

空價一部十錢 半年六十錢 一年一圓

番地中井様。價金四十錢

文化運動

編輯兼 土屋 觀道

編輯の後に 先生にも關西へ御

◎光明教壇

發行所 眞生社

出發なるのを一日延べて手傳つて

(駿河台お茶の水閣下車明治

東京市芝區芝公園第十四號地九番

頂き漸く纏めることを得ました、

大學正門右)

東京市外西巢鴨町二七二番地

毎月發行が遅れ勝ちて濟ませんが

□定日講演會 毎金曜日夜 土屋

印刷人 原 子 廣 宣

御宥し下さいませ、原稿通信を澤

觀道、其他

印刷所 無我山房印刷工場

山どうぞ (尅)

□修養土曜會 第三土曜夜 西川

東京市外西巢鴨町二七二番地

○各壹圓 廣川常三郎様 奥田英

寄贈並誌料拂込芳名

大正十一年二月三日第三種郵便物認可大正十一年七月三十日印刷納本大正十一年八月一日發行(毎月一回一日發行)